



金沢大学広報誌 | アカサス

Acanthus

山崎光悦新学長インタビュー…P.2

YAMAZAKI プラン 2014
を実現するために……………P.6



時流を読み、
次の一手を打つ!



世界で輝く 金沢大学を めざして



山崎光悦学長の改革構想。

それは、現代に必要とされる大学の在り方を見つめなおすことで導き出された。



今こそ改革を

かつて世界トップレベルの科学技術大国であった日本の国際競争力低下は著しく、とりわけものづくり産業の競争力は、生産拠点の海外移転などにより、急激に低下しています。日本の国際競争力を復活・強化し、永く将来にわたって我が国の経済成長を維持するためには、人材育成を行う大学教育が担う役割は極めて重要であるといえるでしょう。

その一方で、大学に入学してくる若者たちは、何不自由なく満ち足りた社会環境のなかで育った、ある意味、ハングリー精神に欠けている世代ともいえます。新興国の競争力の源泉には、「もっと豊かになりたい」、「よりよい生活を送りたい」という精神があります。学生にこうした国の人たちと互角以上に渡り合える高度な専門人材、グローバルに活躍できるリーダーとして育てもらうために、まずは「向上心を持ち、生涯学び続ける

姿勢」、「主体的に考える力」といった、人間力を鍛えることが大学の使命だと考えています。

また、金沢大学は、2008年4月に学域学類制を導入し、14年3月に、6年制の学類も含め、すべての学類から卒業生を社会に送り出すことができました。この間、より良い人材を育成するため、さまざまな仕掛けを展開してきましたが、それらがうまく機能しているのか、点検する時期にきています。

次代の金沢大学を 創造するために

“教育・研究・診療・社会貢献、そして大学の運営方針の現状、すべてを見直し、ビジョンに沿ったスピード感ある改革にチャレンジする。”これが私の方針です。

改革を成功させるにはスピード感が欠かせません。この4月から新たに立ち上げた大学改革推進委員会を中心に、具体的な行動計画や改革の方針を「YAMAZAKIプラン2014」としてとりまとめました。この組織およびプランに基づき、学生、教職員、本学に関わる全員が充足感を得られるような教

育・研究・大学運営を行い、「皆で頑張る、世界と地域に誇れる次代の金沢大学」を創造していきます。

人間力と国際通用性を もった人材の育成

社会で活躍するために必要となる人間力と国際通用性を備えた金沢大学ブランドの学生を育成するため、まず、学生が卒業時までに身につけておくべき能力を明確化します。これらは「金沢大学グローバルスタンダード」といい、次の5つの能力で構成されます。

5つの能力

- ①自分の立ち位置を知る
- ②考えを表現する
- ③自分を鍛える
- ④未来を予測する
- ⑤文化を背景に世界と繋がる

これらを育成するため、まず、「共通教育」改革を実施します。

現在の共通教育は、導入教育から現代的教養の涵養をテーマとした、いわば「好きなものだけをつまみ喰いする」教育になっている

面があります。

しかし、自立に向けた真の人間力を形成する上では、「好きなもの以外でも栄養的に必要なものは採らなければならない」教育であることが重要です。

両方をバランスよく採ることのできる共通教育プログラムを検討・構築していきます。

また、大学で過ごす期間は、多くが4年間から6年間です。この間は、長いようで短い。本学の卒業生が、将来にわたり、自分の専門分野で活躍し続けるためには、卒業後もずっと学び続ける意欲や姿勢を持つことが何より大切です。

こうした意欲や姿勢の持てる専門分野との出会いやきっかけづくりについても、積極的に行っていく必要があると考えています。

異文化交流を推進し 国際感覚を養う

語学力と国際感覚を兼ね備えたグローバル人材を育成するため、日本人学生の留学支援および留学生の受け入れ拡大を推進します。

すでに、日本人留学生の派遣と外国人留学生の受け入れを強化する目的で、海外に留学する学生180人に一人当たり10万円、外国人留学生には18万円を支援して

います。この取り組みのさらなる拡大などにより、私の任期中には短期留学も含め、年間1,200～1,300名を海外に派遣したいと考えています。そうならば4年間で約5,000名。卒業時には学生の約半数がなんらかの海外経験を有している状況になるでしょう。

また、2012年には大学敷地内に、日本人学生と外国人留学生がともに生活し、交流する学生留学生宿舎「先魁^{さきかけ}」を設置しました。文化的背景の異なる学生が共同生活を行っていくためには、語学力や国際感覚が必須です。こうした施設をさらに拡大し、キャンパス内での異文化交流を促進していきます。

世界トップレベルの 研究拠点形成

本学は、大学憲章において「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」、「東アジアの知の拠点」という基本理念を掲げています。この理念を追求していくため、研究力のさらなるレベルアップは欠かせません。

世界の大学ランキングにはさまざまな指標がありますが、あるランキングによると、金沢大学はアジアで100位以内、日本では15位前後と、総合力における国際的な

地位は決して低くはありません。しかし研究の分野別ランキングを見ていくと、強い分野と弱い分野があるのも事実です。総合大学といえども、すべての分野を等しく強化していくのは困難なため、特定の研究分野を絞り込んで、人材と資金を集中させ、「この分野に関しては金沢大学がナンバーワン」と言われるような分野を確立していきたいと考えています。具体的な研究力強化の一つの施策として、研究に専念する教員を配置する「リサーチ・プロフェッサー制度」（仮称）があります。この制度は、大学教員の基本である研究と教育の「二足のわらじ」について、研究力強化の観点から、特定の教員について、教育やマネジメントの負担を減らし、研究に専念できる環境を整備することを目的としています。

また、この制度では、既に本学で研究成果を上げつつある教員を対象とした「内部登用型」に加え、新たに海外の著名な研究者らを誘致する「招へい型」も検討しています。

2014年度からは、本学に7年以上継続して勤務した教員を対象に1年間の有給の研修休暇を提供する「サバティカル制度」も導入しました。教員はサバティカルを利用して、国内外の研究機関などで最先端の研究活動に従事し、研究やネットワークの構築に専念することができます。そこで得たものは、本学の発展に大きく寄与してくれるに違いありません。

世界レベルの研究成果を上げ、知的財産や技術移転のかたちでそれを社会に還元し活用する。そしてこれらの研究成果を、社会や世界と連携する基盤とすること

は、人材育成に並び、大学の重要な使命であると考えています。

地域や企業 他大学との連携を強化

金沢大学が、地域や社会から必要とされる大学であり続けるためには、地域や企業、他大学と連携することも重要です。

石川県には伝統文化が薫る歴史都市・金沢、過疎・高齢化が進む能登、ものづくりが盛んな加賀、と3つの地域が共存しており、それぞれ異なる課題を抱えています。本学は、地域の人々とともに、それらの課題をどう解決していくかを考えていきます。とりわけ、能登が抱える過疎・高齢化の課題は、日本のみならず、いずれ世界が経験することです。能登の課題を解決することで、日本の将来や、世界の課題解決のモデルケースを提示することにもつながります。すでに取り組んでいる「持続可能な循環型エネルギー」の開発などはその一つです。

また、大学間の連携についても

引き続き行っていきます。例えば、大学コンソーシアム石川では、石川県内の他の高等教育機関などと連携して、教育交流・情報発信・地域貢献等を行っていますし、北陸地区国立大学連合（金沢大学、富山大学、北陸先端科学技術大学院大学、福井大学）では、地域の皆さんの生涯学習ニーズに応えるべく、毎年、北陸3県の各会場で「知」との出会いの場を提供しています。

さらに、2013年には、本学の附属病院を中心とする北陸の治験・臨床研究ネットワーク「北陸臨床研究推進機構」を発足させました。これらの取り組みをとおり、積極的に北陸地域の発展に貢献していきます。

全国規模でも、金沢大学、千葉大学、新潟大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学という、いわゆる「旧六」と呼ばれる国立大学において2013年3月に包括連携協定を結び、国立大学連携コンソーシアムを設置しました。6大学は緊密かつ強固に連携し合い、世界水準の独創的な研究拠点の創出、グロー



「水星プラズマ波動観測装置」研究開発プロジェクト

バル社会でリーダーとなる人材の育成、地域社会への貢献などの機能強化を進めています。

連携の先行事例として千葉大学・長崎大学とともに、革新的予防医科学に関する共同大学院設置事業も進めています。

2015年春には、北陸新幹線が開業します。これを機会に、全国の多くの受験生に志願してもらえよう、地域や企業、他大学と連携しながら、金沢大学の特色や魅力を積極的に打ち出していきたいと考えています。



金沢大学長 山崎 光悦 YAMAZAKI Koetsu

Profile／工学博士。1951年12月、富山県小矢部市生まれ。金沢大学工学部卒業、同大学院工学研究科修士課程修了。金沢大学工学部助手、講師、助教授、教授を経て、2002年に学長補佐、2010年から理工研究域長・理工学域長を務める。2014年4月に学長就任。専門は機械工学。

座右の銘は、「定雲止水の中に、鳶飛び魚躍る※（菜根譚）」
※中国の古典より
動中の静、静中の動。活動的であっても動き過ぎず、静か過ぎる中にも必要な動きをすること。

学長の横顔

金沢大学出身の山崎学長に、学生時代の思い出などを聞きました。

Q. 学生時代の一番の思い出は？

A. バレーボール部で過ごした日々です。

毎日、ひたすら練習に励んでいました。時につらいこともありましたが、部活動を通し、生涯にわたる良き友、一生「先生」と呼べる良き師とも出会うことができました。大学の助手になってからもバレーを続け、学内外のいろいろな方々と知り合うことにも役立ちました。

Q. 英語は得意でしたか？

A. 実は苦手意識を持っていました。

30代の研究者時代に、家族を伴って米国・カリフォルニア大学に行くことになり、「家族を守らねば」という想いで、懸命に個人レッスンに通って準備しました。海外での経験は、私にとっても自分を成長させる大きな契機になりました。学生にも、海外留学をぜひ勧めたいです。



金沢大学で教育・研究に携わる教職員のバイブルである金沢大学憲章を改めて見てみると、その前文に「本学の活動が21世紀の時代を切り拓き、世界の平和と人類の持続的な発展に資するとの認識に立ち、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」の位置付けをもって改革に取り組む」と高らかに謳っています。この大学憲章前文中で最も大切な箇所は、金沢大学は「研究大学」であることと「改革に取り組む」ことを明言しているところです。これからより良い研究環境の整備に努め、世界に名立たるいくつかの研究拠点が、ここ金沢大学で構築できるように努力していきます。そのためには、痛みを伴った改革を求めることもあるでしょう。しかしながら研究活動が活発になれば、それに伴って教育活動の活性化も期待できます。現状に甘んじることなく、常に先を見据えた継続的な改革を行っていきます。山崎学長の所信表明にもあった、「改革・チェンジ」を具現化していきたいと考えています。



理事（総括・改革・研究・財務担当）**向 智里**
MUKAI Chisato

Profile
1953年6月6日 生
大阪大学大学院薬学研究科博士課程修了

本学に赴任して以来、文学部（現人文学類）の教員（哲学）としておよそ25年、最近6年間は、附属図書館長も拝命しておりました。大学は変えられるようでなかなか変えられない、というのがこの間の私の印象です。一昨年の中央教育審議会答申では、大学の教育には3つの「ない」が「ある」と指摘されました。存在論の珍問答ではありません。「学生は勉強しない」、「教員は中身の濃い授業をしない」、「大学には教育マネジメントがない」の非存在3兄弟です。この3つの「ない」を「ある」に変えること、これが当面の大学教育の課題ですが、これはずっと戦後の大学教育の難題でもありました。歴史の垢が染みついたこの重い扉を押し開けるには、「教育と研究の適正な分離」以外にはありません。思い切っていえば、先生は自分が得意な内容を教えるのではなく、学生に必要な内容を教える。幸いなことに、本学はすでにその「分離」を学域学類制として実現しています。その深化による「3つの非存在」の克服こそが、私の最大の任務です。



理事（教育担当）**柴田 正良**
SHIBATA Masayoshi

Profile
1953年3月22日 生
名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得退学

YAMAZAKI プラン2014 を実現するために――

山崎光悦学長が推進する改革を力強くバックアップする6名の理事に、今後の大学運営に関する意気込みを聞きました。

昭和40年代には金沢で学ぶ外国人留学生は数名を数えるのみでしたが、いまや500名を超す外国人留学生が金沢大学で学んでいます。本学の求心力を高めるためには、教育、研究、キャンパス、制度、教職員などすべての面でさらなる国際化を進めていかねばなりません。

さらに「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」の位置付けをもって改革に取り組む」と謳った金沢大学憲章は附属病院にもあてはまります。臨床研究の質と量を上げるなど、附属病院の充実にも力を注ぎたいと思います。

また、教職員・研究者、在学・卒業・修了生各員は歴史という経系（たていと）と同窓という緯系（よこいと）で結ばれており、金沢大学の校友会組織は日本と世界の各地にひろがっています。「学生を応援し、教育研究活動を支え、地域社会に貢献する基金」として設立され、留学生の派遣や受け入れも支援している金沢大学基金へも温かいご篤志をお願い申し上げます。

理事（国際・附属病院・同窓会担当）**山本 博**
YAMAMOTO Hiroshi

Profile
1949年9月14日 生
金沢大学医学部医学科卒業

私の主な担当は、企画評価・情報・社会貢献です。企画評価では、「第3期中期目標・中期計画の作成」と「教員評価結果の活用と評価方法の簡略化」、情報では、「学生・教職員への安全・安心な情報環境の提供」、そして社会貢献では、「COC事業の本格実施」「能登里山里海事業の推進」「県市町村との連携事業の推進」に積極的に取り組みます。さらに、図書館・資料館、総合相談室の機能強化にも取り組んでいきます。金沢大学が“世界に誇る大学”となるためには、全構成員が「学習」「研究」「教育」を支援し、その成果を社会に還元することが重要だと思います。山崎学長の掲げる「改革・チェンジ」を推進し、金沢大学が“世界に誇る大学”となるよう努めます。

理事（企画評価・情報・社会貢献担当）**福森 義宏**
FUKUMORI Yoshihiro

Profile
1952年1月2日 生
大阪大学大学院理学研究科博士課程修了

私は事務局出身の理事です。事務局長を兼務しており、事務局の責任者という立場を兼ねております。大学は教員と学生だけで成り立っているわけではありません。もちろん大学の中核は教育と研究ですが、それを支えるのは確固とした大学運営・経営です。その大学運営・経営を中心となって担うのが事務スタッフの役割です。本学の事務局には、総務部、財務部、施設部、学生部、研究推進部などの10部と大学全体の業務の評価や監査を行う特別の部署が設けられており、専門的業務に従事する職員を含めて、約500人の職員（病院のメディカルスタッフは除く）が働いています。近年、本学卒業生の採用が増え、今では多数を占めていますが、他大学も含めて優秀な学生の志望を大いに歓迎いたします。健全でアグレッシブな大学運営・経営を通じて、本学の教育・研究活動を支援し、山崎学長の「改革・チェンジ」を推進していく、これが自分のミッションです。



理事（総務・人事・施設担当）**有松 正洋**
ARIMATSU Masahiro

Profile
1961年12月16日 生
東京大学教育学部卒業

山崎学長より要請を頂き、引き続き特命担当の理事を拝命したことは大変光栄であります。学外の非常勤理事として、微力ではありますが、お役に立てるよう務めたいと願っています。私は、元コマツの取締役専務執行役員、そして現在は株式会社アークの社長をしています。1970年に金沢大学工学部機械工学科を卒業後、コマツにて塑性加工エンジニアとして15年、工場管理部門6年、子会社副社長、社長10年、本社経営管理部門3年、本社事業本部長6年を経て、2001年9月より企業再生支援機構の要請を受け、グローバル企業であるアークという会社の立て直しのため社長として企業再生の仕事をしています。この間、9年間海外勤務の経験もあります。こうした産業界の経験が大学運営のために少しでもお役に立てればと願っています。

理事（特命担当）**鈴木 康夫**
SUZUKI Yasuo

Profile
1948年1月28日 生
金沢大学工学部機械工学科卒業



YAMAZAKI プラン 2014

～金沢大学新ストラテジー～

金沢大学は、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という基本理念に基づき、グローバル社会をリードする人材の育成と、世界に通用する研究拠点の形成を目標に定め、平成26年度からの4年間に、次に掲げる17のビジョンと55の課題からなる改革を、全学を挙げて断行し、「世界に誇る金沢大学」を実現します。

教育改革	I	グローバル化する社会を積極的にリードする人材の育成 ●全学生に共通する人材育成目標の明確化 ●国際コミュニケーション力の強化 ●教育の国際通用性の向上
	II	学域学類制の深化と共通教育の刷新 ●全学人材育成目標に沿った共通教育カリキュラムの構築 ●学域学類制の点検・見直しと教育方法の改善 ●入試制度の改革 ●大学間連携教育の推進
	III	「教育重視の研究大学」にふさわしい大学院教育の高度化 ●専門職大学院の見直しと整備 ●研究科の見直しと整備 ●博士(後期)課程教育の体系化と可視化
	IV	入学から卒業までの徹底した学生支援 ●特色ある教育プログラムを実践する教員(集団)への支援 ●高大接続教育の充実 ●学生支援の充実と相談窓口の一本化
研究推進	V	先進的・独創的研究の推進及び多様な基礎研究の充実 ●金沢大学が世界に誇る学術研究領域への抜本的な支援強化 ●世界的な学問の潮流を見据えた国際的な研究拠点の形成 ●研究大学としての国際的地位の確立に向けた全学的な研究水準の向上

研究推進	VI	研究力強化を促進する体制の整備及び産学官・地域連携の強化 ●研究力強化を念頭に置いた人事制度改革 ●全学的な研究支援体制の充実 ●研究成果の社会還元への推進
国際化	VII	大学の国際化・グローバル化の推進による教育研究力の向上 ●教育の国際化・グローバル化 ●研究のグローバル化 ●キャンパス・組織・制度の国際化 ●国際交流の推進
社会貢献	VIII	地域・社会とともにある大学 ●持続可能社会の実現に向けた地域と社会への貢献
医療・病院マネジメント	IX	臨床研究の推進と先進的医療を担う人材育成 ●臨床研究の推進 ●先進的医療を担う人材育成
	X	健全な大学病院経営と地域中核病院としての社会貢献 ●健全で安定した大学病院経営 ●大学附属病院を中核とした病病・病診連携体制の強化

組織・人事制度	XI	大学改革・機能強化を推進する大学運営 ●学長のリーダーシップの確立を目指したガバナンス改革 ●効率的かつ確実な組織運営 ●大学の戦略に即した柔軟な教員配置 ●研究力強化とグローバル化を実現するための人事制度改革 ●教職員の効果的な能力開発 ●領域融合的な教育研究の推進のための機能強化 ●特色を生かした大学間連携の促進 ●男女共同参画の推進 ●広報の積極的展開
	XII	戦略的・効果的な財政運営の推進 ●学内資源の戦略的・重点的な配分 ●財政運営の効率化に向けた取組み ●研究費等の適切な管理・使用の徹底
	XIII	グローバル化に対応した教育研究環境の確保 ●留学生及び外国人研究者の居住環境の整備 ●社会とのインターフェイス（地域住民との交流拠点）の整備 ●キャンパス環境の再生整備 ●環境マネジメントによる環境負荷低減

情報基盤整備	XIV	安全・安心な情報環境の提供 ●教育でのICT活用及びICT教育の強化 ●学内情報サービスの更なる推進 ●情報セキュリティの強化
	XV	附属図書館・資料館の教育研究活動支援機能の強化 ●教育研究活動の基盤となる蔵書の電子化の推進及び最新の学術情報の受発信機能の強化 ●附属図書館における学習支援機能の強化 ●地域住民に対する附属図書館及び資料館のサービスの向上 ●公文書及び博物資料の確実な保存の推進
同窓会・基金	XVI	同窓会との相互支援による教育・研究・社会貢献活動の充実 ●同窓会ネットワークの強化 ●金沢大学基金の充実と有意義な運用
	XVII	教員評価制度の活用と将来計画の策定・実行 ●教員評価による教育研究力の強化 ●機能強化に向けた将来計画の策定・実行





<http://www.kanazawa-u.ac.jp/>